

陳後主「臨行詩」の日本伝来とその受容

—大津皇子「臨終一絶」の遡源をめぐって

葛 継 勇

はじめに

古代日本は、遣隋使・遣唐使の派遣を通じて、直接に中国文化を享受した。「虚往実帰（虚しく往きて実ちて帰る）」と言われるように、唐文化はこれまでにないスピードで日本に伝来し、日本文化の形成・発展に重要な役割を果たした。例えば、日本に伝わった漢詩は文明の種として芽生え、次第に成長して、日本人の精神文化生活の不可欠な一部分となった。本稿で論じる陳後主の「臨行詩」もその一つである。

従来、陳後主の「臨行詩」についての研究論著は、主に小島憲之氏、福田俊昭氏、濱政博司氏、金文京氏ら研究者の業績があるが、陳後主の「臨行詩」の日本伝来とその受容についてはこれまでほとんど言及されていない。⁽²⁾ 筆者も、金文京氏の挙げた「臨終詩」九首以外に、『五灯会元』卷十八に見られる用例を補い、五代詩人の江為は同族の江総を経由して陳後主の「臨行詩」を知って、真似て詠んだのであり、大津皇子の「臨終一絶」は陳後主の詩を改作したものだという論考を発表したことがある。⁽³⁾ しかし、前稿では紙幅の制約のために、陳後主の「臨行詩」はどのように日本（倭国）に伝わり、大津皇

子に知られたのかという問題については、十分に論ずることができなかった。

そこで、ここに稿を改めて、陳後主の詩と隋僧吉蔵、日本僧智蔵との関係を考察しながら、大津皇子の「臨終一絶」の成立経緯を追究したいと思う。

一 陳後主の詩と智光、吉蔵

陳後主の詩は智光の『浄名玄論略述』巻一本に収録されている。すなわち、「至長安懸芙蓉曲水日嚴精舍」の注疏として、以下のように記されている。本論の原点として重要であるので、やや長文になるが引用する。

(1) 大師生於梁末、長於陳代。及于陳滅、以隋開皇十八年至於長安。長安陳朝相去凡三千三百里。春時發去、秋時還矣。長安為隋王之所都。

(2) 如有伝曰、後周終王号少帝闡、將諸太夫享祀先廟。掌客之臣楊堅有二美女与一男、男是楊光也。堅使此二女拳觴上帝。帝感於二女好色、即敕之曰、「欲納其女弟耳。」堅乃獻之。仍納此女而棄先妃、寵愛甚重。經乎三年、女啓帝曰、「欲見父焉。」乃詔、「莫過三日歸矣。」女退語父、「欲帝位乎。」父曰、「若似朝花、一日得耳。」女曰、「欲齎銛刀。」遂置靴裏而入宮中。帝善非違約、甚為讌樂而臥。女以銛刀密刺帝頸、乃出敕曰、「楊堅入宮、因寵愛女、而讓位於堅矣。」堅乃施行云、「威憲去可去用可用。」不知所以然之、忽行此事。已獲天下、群臣皆服、無敢出異言者。躬治万機、其勢亦爾。堅乃兼文武、遠振威德。次其子光襲於位。然即隋有二君、合三十八年。堅初年号開皇、二十年。次年号仁壽、四年。光年号大業、十四年。凡陳合五主三十二年、從大將軍陳霸先至叔宝。叔宝在位八年、以己酉年正月為隋楊堅所威(滅?)。叔宝之臣号曰妙景、其妻妍美。王聞感念、乃任景以將軍居成隋之南境、而集其妻納于宮中。景乃言、「成境有限、無所奈何。心雖甚悔、今無所為。」遂生叛逆、使人告隋朝曰、「叔宝無義失道、虐惡甚之。」堅固(故?)作色而怒

曰、「天授不取、還受殃耳。」乃以楊光為大將軍、率諸兵卒、度江伐陳。臨發之日、堅語光等、「朕聞其古藏者善達法門、宜申誠心要請之。至今伐于陳、豈貪其地乎。良由有道之王（主？）耳。」以鐵鑊与鼓（船？）權為浮梁而度津、景前導而伐之。遂平其城、而囚執叔宝並子。光乃申堅意確請。大師撫嘆而応之。既已、還于長安矣。宝發路、詠曰、「鼓聲推（催）命役（短？）、日光向西斜。黄泉無客主、今夜向誰家。」及度□津至梁上、宝詠曰、「聞道長安路、今年過□津。請問浮梁上、度幾失鄉人。」遂至於隋。諸家大人看之感慕。宝子入宮、堅使為詠。詠曰、「年少未敢書、□詠牆上草。生処非不高、但恨逢霜早。」又作詠曰、「野林無大小、山花色並鮮。唯有權折枝、独自不知春。」

(3) 然堅自大師未至之前、預造日嚴精舍。遂及至、自躬出迎之、止住其中。事以国師之礼、勸請伝法。暨於光辰、彌復敬重。於是大師興隆大法、仍制淨名玄等。稟法之徒百千万衆、而善知法、唯慧牘法師及一音慧藏等焉。言長安者、王都之号而有二処。（後略）

(1) 大師 梁末に生まれ、陳代に長ず。陳の滅ぶに及び、隋の開皇十八年を以て長安に至る。長安は陳朝と相去ること凡そ三千三百里。春時に発ち去り、秋時に還る。長安は隋王の都する所と為る。

(2) 伝有りて曰ふが如し、後周の終王は少帝闡と号す。諸太夫を將ゐて先廟に享祀す。掌客の臣楊堅に二美女と一男有り、男は是れ楊光なり。堅此の二女をして觴を挙げ帝に上らしむ。帝は二女の好色に感じ、即ち之に敕して曰く、「其の女弟を納れんと欲するのみ」と。堅乃ち之を獻ず。仍りて此の女を納れ、先妃を棄て、寵愛すること甚だ重し。三年を経て、女帝に啓して曰く、「父に見えんことを欲す」と。乃ち詔す、「三日を過ぐるごとくして帰れ」と。女退きて父に語るに、「帝位を欲するか」と。父曰く、「朝花に似たるが若し、一日得るのみ」と。女曰く、「銚刀を齎さんと欲す」と。遂に靴裏に置きて宮中に入る。帝約に違ふにあらざるを善しとし、甚だ讌樂を為して臥す。女銚刀を以て密かに帝の頸を刺し、乃ち出でてで敕して曰く、「楊堅宮に入れ。女を寵愛せるに因りて、位を堅に譲らん」と。堅

乃ち施行して云ふ、「威憲、去るは去るべく、用ふるは用ふべし」と。之を然りとする所以を知らず、忽ち此の事を行へり。已に天下を獲て、群臣皆服し、敢へて異言を出す者無し。躬ら万機を治め、其の勢も亦た爾り。堅乃ち文武を兼ね、遠く威徳を振ふ。次いで其の子光、位を襲く。然して即ち隋に二君有り、合して三十八年なり。堅初め開皇と年号すること二十年。次いで仁壽と年号すること四年。光大業と年号すること十四年なり。凡そ陳は五主を合して三十二年、大將軍陳霸先従り叔宝に至る。叔宝位に在ること八年、己酉年正月を以て隋の楊堅の滅ぼす所と為る。叔宝の臣号して妙景と曰ふあり、其の妻妍美なり。王聞きて感念し、乃ち景に任ずるに將軍を以てし、隋を成るの南境に居らしめ、而して其の妻を集めて宮中に納る。景乃ち言ふ、「境を成るに限り有り、奈何ともする所無し。心に甚だ悔ゆると雖ども、今は為す所無し」と。遂に叛逆を生じ、人をして隋朝に告げしめて曰く、「叔宝義無く道を失ひ、虐悪甚し」と。堅固らに色を作し怒りて曰く、「天授くるに取らざるは、還つて殃を受くるのみ」と。乃ち楊光を以て大將軍と為し、諸兵卒を率ゐ、江を度りて陳を伐つ。発するに臨む日、堅光等に語る、「朕聞く、其れ吉蔵なる者は善く法門に達すと。宜しく誠心を申べて之に要請すべし。今陳を伐つに至りては、豈に其の地を貪るか。まことに有道の王（主？）に由るのみ」と。鐵鑣と船とを以て権りに浮梁を為りて津を度り、景前導して之を伐つ。遂に其の城を平らげ、叔宝並びに子を囚執す。光乃ち堅の意確く請ふを申ぶ。大師撫嘆して之に応ず。既にして長安に還る。（叔）宝路を發するに詠みて曰く、「鼓聲命の短きを催し、日光西に向きて斜めなり。黄泉に客主無く、今夜誰が家に向はん」と。□津を度り梁上に至るに及んで、宝詠じて曰く、「聞道くならく長安の路、今年□津を過ぐ。請問す浮梁の上、幾たりの失郷の人の度るか」と。遂に隋に至る。諸家の大人之を看て感慕す。宝の子宮に入るに、堅詠を為さしむ。詠じて曰く、「年少く未だ敢へて書かず、□に牆上の草を詠む。生いし処高からざるに非ず、但だ霜に逢ふことの早きを恨む」と。又た詠を作して曰く、「野林大小となく、山花色並びに鮮かなり。唯だ権りそめに枝を折るものあり、独（ひと）り春を知らず」と。

(3) 然るに堅 大師の至らざる前より、預め日嚴精舎を造る。遂に至るに及び、自躬みづから出でてこれを迎へ、其の中に止まり住ましむ。事ふるに国師の礼を以てし、法を伝ふることを勧請す。光辰に暨び、彌いよ復た敬重す。是において大師大法を興隆し、仍りて『浄名玄』等を制す。法を稟くる徒 百千万衆なるも、善く法を知るは、唯だ慧贖法師及び一音慧藏等のみなり。長安と言ふは、王都の号にして二処有り。(後略)

このうち、(2)「如有伝曰」の内容について、金文京氏は、『開業平陳記』『大業拾遺記』の関連記事にも合致し、その原型は陳滅亡後に江南地域で生まれた伝説から成立したものである、と指摘した⁽⁴⁾。また、文中の人物「妙景」の原形は『南史』蕭摩訶伝に見える蕭摩訶であり、智光(或いは智光が引用した材料の原作者)は同じ発音の「妙景」二字を選択したのであろう。つまり、古代の発音「摩訶」発音「moke」と「妙景」[mioké]はよく似ていることが指摘できる。したがって、(2)「如有伝曰」の内容はやや荒唐無稽であり、構文もぎこちないが、歴史事実と無関係であることは言い切れないだろうとする。

そして、文中の「楊光」が隋煬帝楊広であり、中国人が「広」を「光」と書き間違えることは考えにくいので、(2)「如有伝曰」の内容は日本人によって書かれたもの、もしくは百済人或いは新羅人乃至日本に亡命した外来移民によって書かれたものである、と金文京氏は主張した⁽⁵⁾。しかし、安澄『中論疏記』所引の『淡海記』には「陳時、于楊光而所伐。以破国之日、大師(吉蔵)来至長安(陳の時、楊光において伐つ所なり。国を破るの日を以て、大師来りて長安に至る)」とあり、「光」の字が使用されている。

煬帝の名「広」が「光」と書かれたのは、恐らく当時の隋人が避諱したためであろう⁽⁶⁾。『浄名玄論略述』の作者智光は唐代の人であるから、煬帝の名を避諱する必要はなく、「広」と「光」とは中国語においても日本語においても同音であるから、「広」が「光」と書かれたとしても、一介の外国人僧侶にとって特に問題ではなかったのだろう。また、智光と同じ逸

話を挿入する『淡海記』でも、同じく作者が引用した原資料には「光」を「広」と記載したと思われる。それでは、この「原資料」すなわち(2)「如有伝」の「伝」とは、どんなものであるうか。

僧智光(七〇八〜七七六?)は、『元亨釈書』卷二智光伝には「釈智光、内州人。共礼光止元興寺、得智蔵三論之深旨(釈智光、内州の人なり。礼光と共に元興寺に止まり、智蔵に三論の深旨を得たり)」とあり、『扶桑略記抄』卷二の天平十七年正月己卯廿一日条には「爰有釈智光者、河内国安宿郡鋤田寺沙門也。俗姓鋤田連、後改姓上村主。母飛鳥部氏也。天性聰明、智惠殊勝、制孟蘭盆・大般若等經(爰に釈智光なる者有り、河内国安宿郡鋤田寺の沙門なり。俗姓鋤田の連、後に姓を上村主と改む。母は飛鳥部氏なり。天性聰明にして、智惠殊に勝れ、孟蘭盆・大般若等經を制す)」とあるように、彼は河内国人であり、智蔵に師事し、元興寺に止住した三論宗の高僧である。

また、末木文美士氏が指摘しているように、『浄名玄論略述』のほか、智光は『孟蘭盆經述義』一卷、『大般若經述義』一卷、『大惠度經疏』二十卷、『初学三論標宗義』一卷、『正觀論』一卷、『肇論述義』(卷数不詳)、『法華玄論略述』五卷、『中論疏記』三卷及び『浄名玄論略述』七卷などの三論教学関係書物を著している。その他、『無量寿經論釈』五卷、『四十八願釈』一卷、『安養賦』などの浄土教関係の著作がある。その中の『法華玄論略述』、『浄名玄論略述』と『中論疏記』は、それぞれ三論宗の高僧吉蔵(五四九〜六二三)の著した『法華玄論』十卷、『浄名玄論』八卷、『中論疏記』十卷を注釈したものである。したがって、吉蔵の多数の著書を注釈した智光が陳の亡国や隋の誕生に関する吉蔵の記述に注目したのは、必然と考えてよいであろう。

吉蔵(五四九〜六二三)の俗姓は安氏で、南京で生まれ、先祖は西域安息国の人である。吉蔵は隋の百越征討の際に、会稽(現在の浙江紹興県)の嘉祥寺に住し、三論を究めた。その後、揚州の慧日道場・長安の日嚴寺で三論や法華の布教や講説を行った。唐代に入ると、長安の實際寺、定水寺、会昌寺、延興寺等に住して、僧衆を統領する大徳十人の一人として徴用された。また、長安で三論注疏を完成し、三論宗を創設した。彼は安息国出身であることから、胡吉蔵と言われ、嘉祥寺

に住したことから、嘉祥大師とも言われた。

前掲の『浄名玄論略述』巻一本には、陳を征伐する際、吉蔵は都の建康に居たと思われる。また、『統高僧伝』巻十一の吉蔵伝に、

具戒之後、声聞転高。陳桂陽王欽其風采、吐納義旨、欽味奉之。隋定百越、遂東游秦望、止泊嘉祥、如常敷引。(中略)在昔陳隋廢興、江陰凌乱。道俗波迸、各棄城邑。乃率其所屬、往諸寺中。但是文疏、並皆收聚、置於三間堂内。及平定後、方洮簡之。故目学之長、勿過於蔵。注引宏広、咸由此焉。

具戒の後、声聞うた転た高し。陳桂陽王其の風采を欽つみて、義旨を吐納し、欽み味はひて之を奉ず。隋百越を定め、遂に東のかた秦望に遊び、止まりて嘉祥に泊し、常の如く敷引す。(中略)在昔陳隋廢興し、江陰凌乱す。道俗波迸し、各々城邑を棄つ。乃ち其の属する所を率ゐて、諸寺中に往く。但だ是れ文疏は、並びに皆收聚して、三間堂の内に置く。平定の後に及び、方に之を洮簡す。故に目学の長は、蔵に過ぐるは勿し。注の引くこと宏広なるは、咸みな此に由れり。

とあり、陳の滅亡の際、吉蔵は建康の諸寺を奔走し、「文疏」を集めた。したがって、隋軍は陳後主らを囚執する時、吉蔵は建康にいたのである。吉蔵は陳の桂陽王などの王公貴族に尊重されたことから、天台宗の智顛(五三八〜五九七)と同じく、陳の滅亡の直前、吉蔵は王公貴族ないし陳後主に誘われ、建康で講經していたのかもしれない。

『南史』巻十陳後主本紀の禎明三年正月戊辰条には「僧尼道士尽皆執役」とあり、禎明三年正月に、僧尼と道士は陳後主と一緒に「執役」された。また、前掲の『浄名玄論略述』巻一本には「光乃ち堅の意確く請ふを申ぶ。大師撫嘆して之に応ず。既にして長安に還る」とあることから、吉蔵も陳後主と同行して長安に連行された可能性が高い。したがって、陳後主の「臨行詩」を聞き取る人物には、陳後主の「狎客」である江総のほか、僧吉蔵もいたと考えられる。おそらく、ここ

で問題としている陳後主詩は僧吉蔵の手になる関連記事から抄録されたものであろう。

陳後主の「臨行詩」は、『浄名玄論略述』の中の「有伝云」に記されているが、現存する吉蔵の『浄名玄論』等の著作には、前掲の「有伝云」の内容が見られない。では、中国に留学したこともない智光は誰から、どのように陳後主の詩を入手したのであろうか。

二 慧灌、福亮と道慈

倭国に赴いたことのある吉蔵の弟子には、高句麗僧の慧灌（恵観、恵灌とも書く）がいる。慧灌は日本で初めて三論学説を広げ、日本三論宗の祖とされている。慧灌の後に、僧智蔵及び智蔵の弟子道慈が入唐し、三論宗を学んだ。道慈は帰国後、吉蔵の三論学説を日本に広げ活躍した。

『日本書紀』卷二十二の推古天皇三十三年正月条には「戊寅、高麗王貢僧惠灌。仍任僧正（戊寅、高麗の王僧惠灌を貢む。仍りて僧正に任す）」とある。また『元亨釈書』卷一の慧灌伝には、

釈慧灌、高麗国人、入隋受嘉祥吉蔵三論之旨。推古三十有三年乙酉春正月本国貢来、住元興寺。其夏天下大旱、詔灌祈雨。灌著青衣講三論、大雨便下。上大悅、擢為僧正。後於内州創井上寺、弘三論宗。

釈慧灌、高麗国の人なり。隋に入りて嘉祥吉蔵に三論の旨を受く。推古三十有三年乙酉春正月、本国に貢来し、元興寺に住す。其の夏、天下大旱して、灌に詔して雨を祈らしむ。灌青衣を著て三論を講ずれば、大雨便ち下る。上大いに悦び、擢んで僧正と為す。後に内州において井上寺を創り、三論宗を弘む。

とある。これらの記録によると、慧灌は隋から高句麗に帰った後、推古三十三年（六二五）正月に倭国に至った。吉蔵は唐の武徳六年（六二三）に亡くなっているので、慧灌が隋から高句麗に帰ったのはその前後であろう。

慧灌の弟子には呉国人の福亮がいる。『元亨釈書』卷十六呉国福亮伝には「釈福亮、呉国人。受三論於嘉祥。齊明四年、内臣鎌子于陶原家精舍請亮講維摩詰經（釈福亮、呉国の人なり。三論を嘉祥に受く。齊明四年、内臣鎌子陶原家精舎において亮に請ふて維摩詰經を講ぜしむ）」とあり、福亮は嘉祥大師吉蔵に従つて三論を学び、齊明天皇四年（六五八）に倭国で維摩経を講じた。『太子伝私記』に収録される「法起寺塔露盤銘」（『寧楽遺文』下巻所収）に「至于戊戌年、福亮僧正聖徳皇御分敬造弥勒像一軀、構立金堂（戊戌年に至り、福亮僧正 聖徳皇の御分に弥勒像一軀を敬造し、金堂を構立す）」とあることから、福亮は舒明天皇十年（六三八）に聖徳太子の冥福を祈るために弥勒仏像を作り、法起寺の金堂を建てた。したがって、福亮が倭国に赴いたのは舒明天皇十年以前であると考えられる⁸⁾。

慧灌や福亮が前述の陳後主の詩を倭国に将来したとすれば、大津皇子や智光もその詩を書き写した、或いは模倣した可能性がある。しかし、隋における慧灌と福亮の活動を記した資料はなく、陳後主の詩が彼らによって将来されたかどうかは定かではない。

『三国仏法伝通縁起』卷中には「慧灌僧正以三論授福亮僧正、福亮授智蔵僧正。智蔵越海入唐、重伝三論。（中略）智蔵上足有三般匠、乃道慈・智光・礼光也（慧灌僧正三論を以て福亮僧正に授け、福亮智蔵僧正に授く。智蔵海を越えて入唐し、重ねて三論を伝ふ。（中略）智蔵の上足に三般の匠有り、乃ち道慈・智光・礼光なり）」とあるように、智光の同門には、唐へ赴いた留学僧の道慈もいた。道慈について、『元亨釈書』卷二の道慈伝には

事吳智蔵、稟三論学。大宝元年入唐請益、于時武后長安之始也。蹈勝地、尋明師、経律論多涉獵、益究三論之旨。養老元年帰、盛唱空宗。天平九年冬十月、啓最勝会於大極殿、其儀同元日。慈為講師。初元年將新大官寺、下詔覓伽藍營造

之宏規。時無委者。慈奏曰、「臣在唐時儉凶西明寺、心中誓念、若帰本土、柄道福願規模之。今陛下之睿志、臣之先抱也。」即上之、上大悅、詔慈為造寺監護而居焉。

呉の智藏に事へて、三論の学を稟く。大宝元年入唐請益す、時に武後の長安の始めなり。勝地を蹈み、明師を尋ねて、経律論多く涉獵し、益々三論の旨を究む。養老元年帰りて、盛んに空宗を唱ふ。天平九年冬十月、最勝会を大極殿に啓くに、其の儀元日に同じ。慈講師と為る。初元年将に大官寺を新にせんとし、詔を下して伽藍营造の宏規を覓む。時に委る者無し。慈奏して曰く、「臣唐に在る時、儉かに西明寺を凶き、心中に誓念すらく、若し本土に帰れば、道福を柄せば、願はくは之を規模とせんと。今陛下の睿志、臣の先に抱くところなり」と。即ち之を上るに、上大いに悦び、慈に詔して造寺を為し監護して居らしむ。

とある。また、『続日本紀』卷十五の天平十六年十月条には

辛卯、律師道慈法師卒。法師俗姓額田氏、添下郡人也。性聡悟、為衆所推。大宝元年随使入唐、涉覽經典、尤精三論。養老二年帰朝。(中略)卒時年七十有余。

辛卯、律師道慈法師卒す。法師俗姓は額田氏、添下郡の人なり。性聡悟にして、衆の推すところと為る。大宝元年使に随ひて唐に入り、經典を涉覽し、尤も三論に精し。養老二年帰朝す。(中略)卒する時年七十有余。

とある。亡くなった天平十六年(七四四)には、「七十有余」であるから、道慈は六七〇年前後の生まれであり、大宝元年(七〇一)に唐に留学する時は三十歳余であったと推測できる。

また、『懷風藻』道慈伝には、

少而出家、聡敏好学、英材明悟、為衆所推。大宝元年、遣学唐国。(中略)遊学西土、十有六歳。養老二年、帰来本国。帝嘉之、拜僧綱律師。性甚骨鯁、為時不容。解任帰、游山野。時出京師、造大安寺。年七十余。少くして出家し、聡敏にして学を好む。英材明悟、衆に推さる。大宝元年、唐国に遣学す。(中略)西土に遊学すると、十有六歳。養老二年、本国に帰来す。帝之を嘉みしたまひ、僧綱律師に拜したまふ。性甚だ骨鯁、時に容れられず。任を解きて帰り、山野に遊ぶ。時に京師を出で、大安寺を造る。年七十余。

とある。この「時年七十余」いう表現は、前掲の「卒時年七十有余」と合致することから、これは大安寺を建立する時の年齢ではなく享年である。この記載によると、道慈は大宝元年に入唐し、唐で十六年間過ごし、養老二年(七二八)に帰国した。⁹唐では、当時の都の長安西明寺¹⁰で学んだことがわかる。前掲の『元亨釈書』巻一道慈伝によると、在唐中、仏教典籍に涉った道慈が、帰国時に多くの唐仏教典籍を将来したとされる。また、智光の著作には、当時唐で新たに訳された経論の影響が少なくないという指摘¹¹を考慮すると、智光は道慈の将来した新訳の三論經典を参考にした可能性がある。

ところが、大津皇子の詩は朱鳥元年(六八六)に誕生したので、時間的に道慈が唐に留学する前に、陳後主の詩は既に日本に伝わっていることになる。したがって、智光は彼の師の僧智蔵から陳後主の詩を知った可能性が高い。

三 智蔵、吉蔵と嘉祥寺

智蔵について、『元亨釈書』巻一の智蔵伝には、

釈智蔵、吳国人福亮法師俗時子也。謁嘉祥受三論微旨、入此土居法隆寺、盛唱空宗、白鳳元年為僧正。道慈、智光皆蔵之徒也。

釈智蔵、吳国人福亮法師俗たりし時の子なり。嘉祥に謁して三論の微旨を受く。此の土に入りて法隆寺に居し、盛んに空宗を唱ふ。白鳳元年僧正と為る。道慈、智光、皆蔵の徒なり。

とある。この「白鳳元年」については、さまざまな説があるが、『扶桑略記』巻五の天武天皇二年三月条の「同月、智蔵任僧正」という記録から、白鳳元年即ち天武天皇二年（六七三）三月に、智蔵は僧正と補任されたことがわかる。ところで、智蔵「謁嘉祥受三論微旨」の「嘉祥」は智蔵本人であるか、それとも嘉祥寺であるか。

『懷風藻』僧正只学生智蔵師伝には以下のように記されている。

智蔵師者、俗姓禾田氏。淡海帝世、遣学唐国。時吳越之間、有高学尼。法師就尼受業。六・七年中、学業穎秀。同伴僧等頗有忌害之心。法師察之、計全軀之方、遂被髮陽狂、奔蕩道路。密写三蔵要義、盛以木筒、著漆密封、負担遊行。同伴輕蔑、以為鬼狂、遂不為害。太后天皇世、師向本朝。同伴登陸、曝涼經書。法師開襟、对風曰、「我亦曝涼經典之奥義。」衆皆嗤笑、以為妖言。臨於試業、昇座敷演、辞義峻遠、音詞雅麗。論雖蜂起、応対如流。皆屈服、莫不驚駭。帝嘉之、拜僧正。時歳七十三。

智蔵師は、俗姓禾田氏。淡海帝の世に、唐国に遣学す。時に吳越の間に、高学の尼有り。法師尼に就きて業を受く。六、七年の中に、学業穎秀なり。同伴の僧等頗る忌害の心有り。法師之を察りて、軀を全くせむ方を計り、遂に被髮陽狂し、道路に奔蕩す。密かに三蔵の要義を写し、盛るに木筒を以てし、漆を著けて密封し、負担遊行す。同伴輕蔑し、鬼狂なりと以為ひ、遂に害を為さず。太后天皇の世に、師本朝に向かふ。同伴陸に登り、經書を曝涼す。法師襟を開き

風に対かひて曰はく、「我も亦た經典の奥義を曝涼す」と。衆皆嗤笑し、妖言と以為へり。試業に臨み、座に昇りて敷演するに、辞義峻遠、音詞雅麗。論蜂のごとくに起れりと雖も、応対流るるが如し。皆屈服し、驚駭せずということ莫し。帝之を嘉みしたまひ、僧正に拜したまふ。時に歳七十三。

まず、注意すべきことは智蔵が「呉学生」ということである。「呉学生」について、東野治之氏は、呉学生は呉国人ではなく、呉に留学した学生（僧）という意味であり、呼称に留学した国名をつける類例はしばしば見られる、と指摘している¹²。しかし、奈良時代では国際婚姻で誕生した混血児は父親の出身国によって国籍を決めたことから、福亮は呉国であり、それゆえ子の智蔵が呉国人と見なされた可能性が考えられる。

その他、『僧綱補任抄出』（上）の「福亮」条には「呉人、熊凝氏、本元興寺」とあり、『本朝高僧伝』巻一福亮伝には「釈福亮姓熊凝氏、本呉国人、来朝出家、従高麗慧灌僧正習稟三論、兼善法相（釈福亮 姓は熊凝氏、もと呉国の人、来朝して出家す。高麗の慧灌僧正に従ひて三論を習稟し、兼ねて法相を善くす）」とあるように、熊凝氏は、福亮が倭国に來た後、出家する前に名乗った氏である。ただし、『懷風藻』には智蔵の俗姓は「禾田氏」とある。このことについて、王勇氏は、福亮が娶った日本女性、つまり智蔵の母親が「俗姓禾田氏」であった、或いは福亮の出家後に、智蔵が禾田家の養子になったからだと指摘した¹³。

第二に、智蔵が入唐した時期は「淡海帝世」（天智朝）のことである。天智朝において、六六五年・六六七年・六六九年の三回にわたって遣唐使を派遣したが、智蔵は六六五年に出発した遣唐使に従って入唐したと思われる。また「六・七年中、学業穎秀」とあることから、呉越地区に六・七年間滞在した智蔵の帰国年は六七二年前後だと推測できる。『元亨釈書』『扶桑略記』に記された三論宗僧の智蔵が『懷風藻』に記載された「僧正、呉学生智蔵師」と同一人物であると主張する井上光貞氏、王勇氏は、智蔵は天智天皇十年（六七二）十一月に帰国したと指摘している¹⁴。また、胡志昂氏も智蔵は天智

天皇十年十一月に唐の使者郭務棕に随つて帰国したが、翌月の天智天皇の崩御、壬申の乱などなどの影響をうけて、翌年の秋以降に入京したと主張している¹⁵⁾。

ただし、唐の使者郭務棕が百濟故地に戻るのは翌年の五月、壬申の乱は翌年の六月である。また、筑紫大宰府到着後、智蔵らの留学人員一行が、唐の使者と行動を共にしたとは考えにくい。『日本書紀』卷二十八の天武天皇元年十一月条には「辛亥、饗新羅客金押宝等於筑紫（辛亥、新羅の客金押宝等を筑紫に饗したまふ）」とある。智蔵は新羅使者の金押実等に随つて、天武天皇元年十一月に筑紫に到着し、翌年二月前後入京し、「試業」に参加したのではないかと考えられる。

また、この「太后天皇世」は天武天皇の皇后鸕野讃良（即位後の持統天皇）あるいは天智天皇の皇后倭姫を指すと言われる。さらに、横田健一氏は、「太后天皇世」とは中国の則天武后を指し、智蔵は天武天皇十二年に帰朝した、と考えた¹⁶⁾。

最近、胡志昂氏は天智天皇の崩御後、皇后倭姫が称制したと考えて、皇后倭姫説が妥当だと主張している¹⁷⁾。しかし、皇后倭姫の称制や天皇としての即位を示す史料はない。「太后天皇世」とは立后された以降の言葉であると考えられる。『日本書紀』卷二十九の天武天皇二年二月癸未条には「立正妃為皇后」とあるように、正妃鸕野讃良が立后されたのは天武天皇二年（六七三）のことである。その下文に「帝嘉之」とあり、天武天皇を指す言葉として、「帝」が使われている。また、持統天皇が「帝」ではなく、「皇太后」と称されたことが『懷風藻』によってわかる。『日本書紀』等の六国史において、「帝」という言葉はほとんど男性天皇の称として使われている。

第三に、前後の文脈から判断すると、「時歳七十三」は智蔵が僧正に任命された時の年齢であるが、帰国後まもなく任命されていることから、入唐時の年齢は六十五歳ぐらゐとなり、高齢での渡唐に疑問が生じる。『懷風藻』道慈伝の「時年七十余」という享年から判断すると、「時歳七十三」は智蔵が亡くなった時の年齢であると考えられる。

また、智光撰『般若心経述義』序文には「智光従生九歳避慣肉処、遊止伽藍。然自志学至於天平勝宝四年、合三十個年（智光生まれて九歳従り肉処を避慣し、伽藍に遊止す。然して志学自り天平勝宝四年に至るまで、合して三十個年なり）」

と自ら述べている。この「志学」を十五歳とすれば、智光は七〇八年に生まれであり、天平勝宝四年（七五二）には四十四歳となる。だから、沙弥になる九歳（出家）の七一六年から「志学」の七二二年までの間に、智光が智蔵の弟子になった可能性は高い。つまり、七一六年から七二二年までの間、智蔵は存命だったのである。

智蔵が七十三歳で亡くなったことを踏まえれば、智蔵は早くとも六四四年に生まれ、「淡海帝世」（六六五年）に入唐した時は二十二歳ということになる。福亮が舒明天皇十年（六三八）以前に日本に來たことから判断すると、王勇氏が指摘したように、智蔵は福亮と日本の女性の間に生まれた混血児である可能性が高いと言えるだろう。

『元亨釈書』卷二十一の天武天皇二年二月二十七日条には「于川原寺写大藏經、沙門智蔵督役、故任僧正（川原寺において大藏經を写し、沙門智蔵督役し、故に僧正に任す）」とあるように、智蔵は帰国後の「試業」で才能を余すところなく發揮したから、川原寺大藏經書写の「督役」に委任され、僧正に任じられたのであろう。

『懷風藻』智蔵伝によると、智蔵は呉越地区の尼から学んだことが分かる。また、嘉祥大師吉蔵は武徳六年（六二三）に亡くなったことから、前述の『元亨釈書』卷一智蔵伝に記された「調嘉祥受三論微旨」の「嘉祥」は吉蔵大師本人ではなく、嘉祥寺を指すに違いない。つまり、智蔵は、吉蔵が開基した越州の嘉祥寺（現在浙江省紹興県平水鎮）で三論宗を学んだということなる。

越州は陳の都の健康から遠く離れているので、「呉越地区で留学した智蔵は陳後主に関する伝説と前述の臨行詩を耳にして、記録した」という金文京氏の推論¹⁸を考え直す必要があるだろう。また、陳後主及び陳の滅亡に関する伝記（例えば『開業平陳記』等）は隋唐時代に広く伝わっていたが、それらの伝記に前述の陳後主の詩が収められていたかどうかは定かでない。

筆者は、智蔵が越州の嘉祥寺で陳後主の詩を知見したものと推測する。智蔵が「淡海帝世」（六六五年）に越州へ赴いた時は、吉蔵の没後四十二年であった。陳が滅亡した後、吉蔵は越州の嘉祥寺に滞在したので、陳の亡国及び陳後主の詩等に

関する記述は、嘉祥寺に残っていた可能性がある。これら嘉祥寺に残された吉蔵の記述は彼の弟子らに認識され、保存されていたはずである。横田健一氏は、智蔵が師事した高学の尼とは吉蔵の弟子に当たると推測した。¹⁹⁾したがって、智蔵は越州の嘉祥寺で前掲の(2)「有伝曰」の内容を知ったと考えられるのである。²⁰⁾

四 智光、安澄と「如有伝」

智光『浄名玄論略述』巻一本に収録される「如有伝」に見える少帝闡関連記事は、安澄『中論疏記』にも記されている。安澄は平安時代初期の三論宗の僧で、奈良大安寺における三論宗の論客として知られた。著書に『中論疏記』八巻があり、これは吉蔵の『中論疏』十巻を注釈したものである。『中論疏記』には、中国、日本の多くの文献が引用されており、資料的価値が高いと言われる。

『中論疏記』巻三には、「言以去仁壽等者」の注疏として、以下の内容が記されている。

(ア) 『述義』引伝云、後周少帝闡在位一年。隋楊堅令子楊光襲位。即隋有二君、合三十八年治之。堅初年号開皇、註二十年。次年号仁壽、註四年。光年号大業、經十四年。今言去者、於大業時、著此疏故。以後望前、故云去仁壽也。

(イ) 『淡海記』云、陳時于楊光而所伐。以破国之日、大師来至長安。長安年号、前名仁壽、後呼大業。又後時号貞觀。故以後望前、名為去仁壽也。

(ウ) 如有偈(伝カ)云…後周終王少帝闡將諸太夫、享祀先廟。掌客之臣楊堅有二美女与一男、男是楊光也。堅使此二女拳觴上帝、帝感等二女好色、即敕之曰、「欲納其弟女耳。」堅乃献之。仍納此女而棄先妃、寵愛甚重。經乎三年、女啓帝曰、「欲見父焉。」乃詔、「莫過三日帰矣。」女退語父、「欲帝位乎。」父曰、「若似朝花、一日得耳。」女曰、「欲齋銛

刀。」遂置靴裏而入宮中。女以鍔刀密刺帝頸、乃出敕曰、「楊堅入宮、因寵愛女、而讓位於堅矣。」

(エ) 有人伝云…一卷『玄義』云、大隋仁壽二年四月、奉命撰。又下文云、如疏初序、准此玄文。仁壽二年造此疏。然有人云、仁壽四年造此疏者、可問也。今檢嘉祥碑、云大業四年。今云仁壽三年。(下略)

(ア) 『述義』に伝を引きて云ふ…後周少帝闡位に在ること一年。隋の楊堅、子の楊光をして位を襲がしむ。即ち隋に二君有り、合して三十八年之を治む。堅初め開皇と年号して二十年を註す。次に仁壽と年号して四年を註す。光は大業と年号して十四年を経。今、去と言ふは、大業の時に於いて、此の疏を著す故なり。後を以て前を望む、故に去る仁壽と云ふなり。

(イ) 『淡海記』に云ふ、陳の時、楊光において伐つ所なり。国を破るの日を以て、大師来りて長安に至る。長安の年号、前に仁壽と名づけ、後に大業と呼ぶ。又た後の時に貞観と号す。故に後を以て前を望み、名づけて去る仁壽と為すなり。

(ウ) 偈(伝の誤りか)ありて曰ふが如し…後周の終王少帝闡諸太夫を將りて先廟に享祀す。掌客の臣楊堅に二美女と一男有り、男は是れ楊光なり。堅此の二女をして觴を挙げ帝に上らしむ。帝二女の好色に感じ、即ち之に敕して曰く、「其の弟女を納れんとするのみ」と。堅乃ち之を献す。仍りて此の女を納れて先妃を棄て、寵愛すること甚だ重し。三年を経、女帝に啓して曰く、「父に見えんことを欲す」と。乃ち詔す、「三日を過ぐるごとくして帰れ」と。女退きて父に語るに、「帝位を欲するか」と。父曰く、「朝花に似たるが若し、一日得るのみ」と。女曰く、「鍔刀を齧さんと欲す」と。遂に靴裏に置きて宮中に入る。女鍔刀を以て密かに帝の頸を刺し、乃ち出でて敕して曰く、「楊堅宮に入れ、女を寵愛せしに因りて位を堅に譲らん」と。

(エ) 人有り伝へて云ふ…一卷『玄義』云ふ、大隋仁壽二年四月、命を奉じて撰すと。又下文に云ふ、疏の如く初めて序し、此の玄文に准ず。仁壽二年此の疏を造る。然るに人有りて云ふ、仁壽四年此の疏を造るは、問ふべきなりと。今

嘉祥の碑を検するに、大業四年と云ふ。今仁壽三年と云ふ。

文中に、(ア)『述義』引伝云の『述義』とは、末木文美士氏によると、『中論疏述義』のことで、智光の『中論疏記』三巻を指すとされている。⁽²¹⁾従うべき見解であろう。つまり、安澄『中論疏記』は智光の『中論疏記』三巻を参考にして書かれたのである。

前掲の『中論疏記』巻三には、(ア)『述義』引伝云、(イ)『淡海記』云、(ウ)「如有偈(伝の誤りか)云」の三つの文章が引用されている。福田俊昭氏は、「如有偈(伝の誤りか)云」以下の内容は『淡海記』云に含まれるものではなく、「如有偈(伝の誤りか)」は独立して引用された文であると指摘した。⁽²²⁾しかし、ただ『述義』(智光『中論疏記』)と記されているのではなく、(ア)『述義』引伝と明示されているから、所引の「伝」は看過できなくて、更に検討する必要があるだろう。

一般的には、同一文章に二箇所にも書物が示されている場合、名前が異なることはありえない。すると、(ア)の「伝」は(ウ)の「偈(伝の誤りか)」と別のものになる。しかし、(ア)にある「後周少帝闡在位一年」から「光年号大業、經十四年」までの内容は、『浄名玄論略述』巻一に引用される(2)「有伝曰」の内容とほぼ同じである。したがって、(ア)『述義』引伝云、(イ)『淡海記』云、(ウ)「有偈(伝の誤りか)云」の三つの文章はそれぞれ独立した引用文ではなく、やはり(ウ)「有偈(伝の誤りか)」を(イ)『淡海記』の一部と見なしたほうが妥当と言えよう。(エ)の部分は、『中論疏記』の作者安澄が書き入れたものである。

その場合は、(イ)の「陳時于楊光而所伐、以破国之日、大師来至長安。長安年号、前名仁壽、後呼大業。又後時号貞觀。故以後望前、名為去仁壽也」という内容は『淡海記』の本文であり、(ウ)「如有偈(伝の誤りか)云」以下の内容は「如有伝」のものである。すなわち、『淡海記』の作者は、直接「如有偈(伝の誤りか)云」の内容を見て、引用したことに

なるう。

仮に福田俊昭氏の指摘に従って、(ウ)「如有偈(伝の誤りか)云」以下の内容は『淡海記』云の一部ではないとする
と、安澄『中論疏記』卷三は(ウ)「如有偈(伝の誤りか)すなわち(2)「如有伝曰」を直接引用したことになる。つまり、それにしても、「如有伝」の内容は確かに存在したのであり、その内容が否定されるものではない。

また、智光の『浄名玄論略述』卷一本には、「至長安懸芙蓉曲水日嚴精舍」という語句の注疏として、(1)、(2)、(3)の内容が引用されている。『浄名玄論』卷一の関連本文は、以下のようである。

金陵沙門釈吉蔵陪従大尉公晋王、至長安縣芙蓉曲水日嚴精舍。養器乖方、仍抱脚疾。恐旋南尚遠、而朝露非奢。每省慰諭之言、遊心調伏之旨。但蔵青裳之歳、頂戴斯経。白首之年、翫味弥篤。願使経胎不失、歴劫逾明。因撰所聞、著茲玄論。

金陵の沙門釈吉蔵 大尉公晋王に陪従し、長安縣芙蓉曲水の日嚴精舍に至る。養器方に乖き、仍りて脚疾を抱く。恐らく南に旋るは尚ほ遠く、而して朝露奢るにあらず。毎に慰諭の言を省み、心を調伏の旨に遊ばす。但だ青裳の歳を蔵して、斯の経を頂戴す。白首の年、翫味弥篤し。願はくは経胎をして失はしめず、歴劫逾明らかならんことを。因りて聞くところを撰し、茲に玄論を著す。

ここには、吉蔵は陳都建康の攻略を指揮した晋王楊広と一緒に現れるが、(2)「有伝」の内容は見られない。

『中論疏記』の(ア)、(イ)、(エ)の内容は「言以去仁壽等者」の説明である。たとえ(ウ)「如有偈(伝の誤りか)云」以下の内容がなくても、原文の理解に何ら影響を及ぼさない。したがって、智光の『浄名玄論略述』卷一本には、(2)「有伝」の内容はなくても、不都合はない。智光には、特に(2)「有伝」の内容を創作しなければならない理由は存在してい

ない。むしろ、智光は忠実に原資料を忠実に写したであろう。したがって、(2)「有伝曰」以下の内容を創作したという見解は、否定的に捉えなければならない。⁽²³⁾

現在、『淡海記』は散逸し、現存していないが、安澄『中論疏記』は、随所に引用されている。金文京氏は、『淡海記』の現実的ではない説話を詳しく考察した上で、それらの奇妙な説話は日本において独自に勝手に作られたものではなく、『捜神記』などの中国古典に同じ内容が記されていることから、これらを活用したものであると指摘された。また、『浄名玄論略述』の場合も事情は恐らく同じであって、何らかの中国文献をリライトしたか、或いは中国からの伝聞を記述したものと考えるのが妥当であると指摘された。⁽²⁴⁾ 金氏の指摘に従えば、『淡海記』には、陳後主の詩を含む内容が存在した可能性が高いと思われる。

『浄名玄論略述』に引用される(2)「有伝曰」の内容は、嘉祥寺にいる吉蔵によって記述され、さらに其の弟子らに熟知され、伝来してきたのであろう。つまり、(2)と(ウ)の「伝」は、智蔵によって日本にもたらされ、智光『浄名玄論略述』、安澄『中論疏記』ないし『淡海記』に引用されたと考えられるのである。

五 智蔵、大津皇子と淡海三船

『扶桑略記』巻四の斉明帝四年条には「同年、中臣鎌子于山科陶原家、屈請呉僧元興寺福亮法師、為其講匠、甫演維摩經奥旨。其後、天下高才・海内碩学、相撰請用如此(同年、中臣鎌子 山科陶原家において、呉僧元興寺福亮法師に屈請し、其の講匠と為し、甫めて維摩經の奥旨を演べしむ。其の後、天下の高才・海内の碩学、相撰して請ひ用ふること此の如し)」とあり、中臣鎌子等の内臣は福亮を招請し、『維摩經』を講じさせた後、「高才」「碩学」の高僧を講經させつづけた。僧正である智蔵は、言うまでもなく当時の王公貴族から招請される人物だったのである。⁽²⁵⁾

『懷風藻』 大津皇子伝には、

性頗放蕩、不拘法度、降節礼士。由是人多附托。時有新羅僧行心、解天文卜筮、詔皇子曰…太子骨法、不是人臣之相。以此久在下位、恐不全身。因進逆謀。迷此註誤、遂凶不軌。

性頗る放蕩にして、法度に拘らず、節を降し士を礼したまふ。是れに由りて人多く附托す。時に新羅僧行心といふもの有り、天文卜筮を解す。皇子に詔げて曰はく、「太子の骨法、是れ人臣の相にあらず。此を以つて久しく下位に在らば、恐らくは身を全くせざらん」と。因りて逆謀を進む。此の註誤に迷ひ、遂に不軌を図る。

とあるように、大津皇子の配下には、経書に詳しい学士のみならず、異国から渡来した新羅僧もいたことがわかる。したがって、大津皇子の周りには外国に留学した人物も多々いたことが考えられる。

ところで、新羅に留学経験のある山田三方の「七夕」詩は、陳後主の「狎客」江総の「七夕」詩を真似て詠んだと見られること²⁶から、山田三方は江総の「七夕」詩だけでなく、陳後主の詩を知って、日本に将来したのであろう。すると、大津皇子は山田三方から陳後主の詩を得て、それを真似た可能性が考えられる。

山田三方は持統六年（六九二）十月に務広肆を授かることから、彼の帰国時期は、それ以前となる²⁷。『日本書紀』によると、大津皇子が亡くなった朱鳥元年十月以前の留学僧の帰国は以下のようなことになる。

- ① 天武天皇十三年十二月癸未に土師宿祢甥が帰国しているが、留学僧は記されていない。
 - ② 天武天皇十四年五月辛未に帰国した学問僧は、観常・雲観の二人しか見られない。
- また、朱鳥元年十月以降、『日本書紀』によると、留学僧の帰国は以下のようなことになる。

- ③ 持統元年九月甲申に帰国した学問僧は、智隆一人しか記されていない。

④ 持統元年九月甲申に帰国した学問僧は、明聡・観智等である。三方沙弥の名前は記されていないが、「等」という表現から見ると、明聡・観智二人だけではなく、そこに含まれた可能性がある。

⑤ 持統元年九月甲申に帰国した学問僧は、智宗・義徳・淨願の三人しか見られない。

したがって、山田三方の帰国時期としては、持統元年九月甲申が最も有力である。つまり、山田三方は陳後主の詩を知って、日本に将来したとしても、朱鳥元年十月に亡くなった大津皇子がこれを知るはずがないのである。

また、新羅僧行心は天文・ト筮というト占の類の法を会得していたようであるが、中国の文人文集についての知識を持っていたかは不明である。したがって、大津皇子が山田三方や新羅僧行心から陳後主の詩を知ったかどうかは判断できないことになる。⁽²⁸⁾

一方、留学僧の智蔵も「尤愛文筆」かつ「詩賦之興、自大津始也」と褒め称えられた大津皇子が交際する対象としては相応しい。大津皇子の詩に「述志」があり、智蔵の詩に「言志」があり、両者には「述懐」類の作品があるのも偶然ではなからう。⁽²⁹⁾ 大津皇子は、僧正智蔵から直接に陳後主の詩を知ったのではないだろうか。⁽³⁰⁾

ところで、『日本書紀』卷三十の朱鳥元年十月庚午条の卒伝に「為天命開別天皇所愛」とあるように、大津皇子は天智天皇に愛されていたのである。彼の母は天智天皇の娘大田皇女であり、妻は天智天皇のもう一人の娘山辺皇女である。また、彼の名前「大津」は、天智朝の都、近江国大津と深くかかわっていると思われる。

また、『懐風藻』の編纂者は『淡海記』の作者と同じく、奈良時代の「文人之首」と言われる淡海三船で、天智天皇の五世孫である。したがって、淡海三船が大津皇子に対して、親近感を抱いてきたのは言うまでもない。血縁関係のせいかな、『懐風藻』に最初挙げられた人物は淡海朝皇太子（大友皇子）であり、続いて河島皇子（天智天皇第二皇子）、大津皇子、智蔵、葛野王等である。

注目すべきことは、智蔵が『懐風藻』において四番目の人物であり、五番目の人物が正四位上式部卿葛野王である。ま

た、葛野王に続く人物は、「諸人未得伝記」とあるように、詳しく知られていなかったようである。³¹ 葛野王は淡海朝皇太子（大友皇子）の第一皇子で、『懷風藻』葛野王伝には「少而好学、博涉經史。頗愛屬文、兼能書画。（中略）皇太后嘉其一言定國。特闕授正四位、拜式部卿。時年三十七（少くして学を好み、博く經史に渉る。頗る文を属ることを愛み、兼ねて書画を能くす。（中略）皇太后其の一言の國を定めしことを嘉みたまふ。特に閱して正四位を授け、式部卿に拜したまふ。時に年三十七）」とあり、「愛屬文」「能書画」だけでなく、かなりの度胸と見識を持ち「一言定國」と言われるほど立派な人物であった。では、一介の僧侶である智蔵が、どうして『懷風藻』には葛野王の前に挙げられ、四番目の人物として置かれたのであろうか。

前述のように、『浄名玄論略述』は八世紀半ばに書かれたものである。时期的には、『懷風藻』（七五一年成立）とほぼ同時期に成立している。つまり、八世紀半ばにおいて、大津皇子の詩と陳後主の詩は同時に世間の注目を浴びていたことがわかる。したがって、『淡海記』『懷風藻』の編集者淡海三船は『浄名玄論略述』の作者智光と同じく、隋が陳を滅亡させたこと及び陳後主の詩を智蔵から知り得ていたに違いない。陳後主の詩に基づいて改作された大津皇子の詩が、淡海三船に注目され、『懷風藻』に収録されたのは尤ものことであったのである。³²

『懷風藻』には、智蔵の詩は二首しか収められていないが、胡志昂氏が指摘したように、智蔵が古代の高僧ばかりでなく、日本最初の詩僧として漢文学に及ばした影響は量り知れないものがあつた。³³ おそらく仏教界における地位だけでなく、智蔵が唐に留学した経歴、持ち帰った漢籍經典及び彼自身の広く深い学識は、「文人之首」とされる淡海三船に注目されたのであろう。勿論、智蔵が将来した陳後主の詩もそこに含まれたの言うまでもない。

おわりに

終わりに、本稿において指摘した三点をまとめておく。第一に、陳後主の「臨行詩」は吉蔵によって記されて、僧智蔵が嘉祥寺でそれを入手し、倭国に将来した後、弟子の僧智光によって『浄名玄論略述』に収録されたと考えられる。

第二に、智蔵との親交を通じて、大津皇子が陳後主の詩を知得し、自殺する前に詠んだ「臨終一絶」詩には陳後主の「臨行詩」の影響が見られた。その後、大津皇子に対する親近感を抱いていた淡海三船によって、その詩が『懐風藻』に収録されたということである。

第三に、「文人之首」である淡海三船は、仏教界における地位だけでなく唐に留学した経歴を持ち、内外経典を将来した智蔵に注目し、彼が将来した陳後主の詩を含む陳後主関連記録を得て、『淡海記』に収めたことが考えられる。

大津皇子の「臨終一絶」なしには『浄名玄論略述』に見える詩は出現しえないという見方は妥当なものではなく、やはり陳後主の「臨行詩」が倭国に渡り、以上のような経緯によって、大津皇子の詩がこれをもとに改作されて、成立したということになる。

注

(1) 王勇『唐から見た遣唐使』、講談社、二〇〇二年。

(2) 今まで、陳後主の「臨行詩」についての研究論者は、小島憲之「大津皇子の文学周辺」(『歴史と人物』一九七八年十一月号)、小島憲之「近江朝前後の文学その二——大津皇子の臨終詩を中心として」(同氏著『万葉以前——上代びとの表現』、岩波書店、一九八六年)、福田俊昭「大津皇子「臨終詩」の系譜」(『日本文学研究』第十八号、一九七九年)、福田俊昭「海を渡った大津皇子の「臨終詩」」(『東洋研究』第一一四号、二〇〇二年)、濱政博司「大津皇子臨終詩と金聖嘆・成三問——日中朝の臨刑詩の系譜」(同氏著『日中朝の比較文学研究』、和泉書院、一九八九年)、濱政博司「大津皇子臨終詩群の解釈」(『万葉集と漢文学』、汲古書院、一九九三年)、金文京「黄泉の宿

- 臨刑詩の系譜とその背景」(『興膳教授退官記念 中国文学論集』、汲古書院、二〇〇〇年)、金文京「從『全唐詩』一首「臨刑詩」談日韓資料在漢学研究上之価値」(『中華文史論叢』第六十四期、二〇〇〇年)、金文京「大津皇子「臨終一絶」と陳後主「臨行詩」」(『東方學報』第七三号、二〇〇一年)などがある。
- (3) 葛継勇「大津皇子の「臨終一絶」と陳後主の「臨行詩」——江為の「臨刑詩」との関連を中心に」(河野貴美子・王勇編『東アジアの漢籍遺産——奈良を中心として』、勉誠出版、二〇一二年)。
- (4) 前掲注(二) 金文京「大津皇子「臨終一絶」と陳後主「臨行詩」」。
- (5) 前掲注(二) 金文京「大津皇子「臨終一絶」と陳後主「臨行詩」」。
- (6) 『浄名玄論略述』卷一「陪從大尉公晋王」の注には「言晋王者、揚(楊)の誤り、以下同じ) 堅之子、名曰揚光。封以揚光而王晋地、從所王処、名曰晋王。光即尊威、不敢言名、故拳処名。」とあるように、避諱のために「晋王」と呼ばれたことがある。
- (7) 末木文美士「元興寺智光の生涯と著述」(『仏教学』第十四号、一九八二年)。
- (8) 『元亨釋書』卷第二十の推古天皇三十三年条に「夏、釈慧灌擢僧正。秋、冬沙門福亮爲僧正」とある。福亮は師僧の慧灌の僧正任命後の三ヶ月経たないうち、僧正に任じられた。しかし、他の文献に見えないことから、この記事は疑わしいと思われる。
- (9) 『元亨釈書』卷一の道慈伝には「釈道慈、姓額田氏、和州添下郡人也。事吳智藏、稟三論学。大宝元年、入唐請益。于時、武后長安之始也。蹈勝地、尋明師、経律論多涉獵、益究三論之旨。養老元年帰、盛唱空宗」とある。これによると、道慈は養老元年に帰国したことになる。
- (10) 六五八年に建てられた西明寺(元は唐の魏王李泰の住宅)は当時未だ存在しなかった。吉藏は長安の日嚴寺、實際寺、定水寺、会昌寺、延興寺等に住み、最後に延興寺で亡くなっている。
- (11) 前掲注(七) 末木文美士「元興寺智光の生涯と著述」。
- (12) 東野治之「法起寺露盤銘」(同氏著『日本古代金石文の研究』、岩波書店、二〇〇四年)第三二六頁。
- (13) 王勇「呉越に留学した智藏」(『中日文化論叢』一九九五号、一九九六年)、王勇「狂人を装う留学僧——智藏列伝」(『アジア遊学』第二十八号、二〇〇二年)。
- (14) 井上光貞「三経義疏成立の研究」(同氏著『日本古代思想史の研究』、岩波書店、一九八六年)、前掲注(十三) 王勇「狂人を装う留学僧——智藏列伝」。
- (15) 胡志昂「釈智藏の詩と老荘思想」(『埼玉学園大学紀要』(人間学部篇)第十号、二〇一〇年)。
- (16) 横田健一「『懷風藻』所載僧伝」(同氏著『白鳳天平の世界』、創元社、一九八九年)。
- (17) 前掲注(十五) 胡志昂「釈智藏の詩と老荘思想」。
- (18) 前掲注(二) 金文京「大津皇子「臨終一絶」と陳後主「臨行詩」」。
- (19) 前掲注(十六) 横田健一「『懷風藻』所載僧伝」。

- (20) 宋の僧普濟『五灯会元』(一二五二年成立) 卷十八、「園通仙禪師法嗣・温州淨光了威禪師」に記されるように、類似の臨終詩は浙江地区に活躍する僧侶の間に伝わっている。前掲注(三) 葛継勇「大津皇子の『臨終一絶』と陳後主の『臨行詩』——江為の『臨刑詩』との関連を中心に」。
- (21) 前掲注(七) 末木文美士「元興寺智光の生涯と著述」。
- (22) 前掲注(二) 福田俊昭「海を渡った大津皇子の『臨終詩』」。
- (23) 前掲注(二) 福田俊昭「海を渡った大津皇子の『臨終詩』」。
- (24) 前掲注(二) 金文京「大津皇子『臨終一絶』と陳後主『臨行詩』」。
- (25) 『懷風藻』大友皇太子伝には「広延学士沙宅紹明、塔本春初、吉太尚、許率母、木素貴子等位賓客。太子天性明悟、雅愛博古、下筆成章、出言為論。」とあるように、大友皇子の周りには学問を交流する「賓客」が多数いた。唐に留学した経歴を持つ智蔵もその一人であろう。
- (26) 月野文子「山田三方の七夕詩における日本の発想——「衣玉」と「彩舟」をめぐる——」(『上代文学』第六十三号、一九八九年)を参照されたい。
- (27) 『万葉集』卷二の一二三番歌の序文には「三方沙弥、園臣生羽の女を娶りて、幾時も経ねば、病に臥して作る歌三首」とある。この三方沙弥は山田三方と同一人物とされる(『万葉集代匠記』)。ただ、作歌の時期は不明である。
- (28) 新羅僧行心について、鈴木靖民「古代東アジアの中の日本と新羅」(同氏著『日本の古代国家形成と東アジア』、吉川弘文館、二〇一一年。初出は二〇〇七年) 一三二―一三三頁を参照されたい。
- (29) 小島憲之「上代日本文学与中国文学(下)」(『塙書房』一九七四年) 第一五八二頁。
- (30) 金文京氏は「大津皇子は多分ある方式を通して此の詩を知るようになり、臨終に詠んだのである」と指摘された。前掲注(二) 金文京「大津皇子『臨終一絶』と陳後主『臨行詩』」。
- (31) 八人目の弁正、終りから七人目の釈道慈、同三人目の釈道融、同二人目の石上乙麻呂に伝がある。恐らく、伝記は五人を記したところで一旦打ち切ったが、後から四人の伝記を付け加えたのであろう。前掲注(十六) 横田健一「『懷風藻』所載僧伝」を参照されたい。
- (32) 濱政博司氏は、「皇子は叔宝との場面、状況相似からふと詩を口にした。死を前にして、あの叔宝詩が浮かび口をついて出て、正に口占した。それが伝えられて『懷風藻』に収められ、今日に伝えられたのであろう」と指摘された。前掲注(二) 濱政博司「大津皇子臨終詩群の解釈」を参照されたい。
- (33) 前掲注(十五) 胡志昂「釈智蔵の詩と老荘思想」。

【キーワード】

・ 陳後主の「臨行詩」 ・ 大津皇子の「臨終一絶」 ・ 智蔵 ・ 智光 ・ 淡海三船